



今日のお話はインドのお釈迦様の時代のお話で、真心の御供養について説かれたものです。

阿闍世王授決経(大正14巻777ページ)や、根本説一切有部毘奈耶薬事第十二(大正24巻52ページ)などに説かれているもので、通常「貧女の一灯」という題名で呼ばれています。

ある時、阿闍世王が国中の油を集めて、お釈迦様に盛大な御灯明の御供養をしました。それを見ていた貧しい老女が、何とか自分もその御灯明の御供養をしたいと思いました。しかし、その老女は貧しくてその油を買う余裕もありません。

老女は、何とか御供養をしたいという気持ちが強くと、全財産を持って油を買いに行き、たった一灯ではありましたが、御供養することができました。

御灯明を御供養した夜、大風が吹いて王様が御供養した万灯は消えてしまいました。その老女の一灯だけは益々明るく、消そうとしても消すことができませんでした。

この真心の御供養の功德で、老女は成仏することになりました。この真心がとつても大事であるというお話です。しっかりと聞いてくださいね。では始めます。



「ウウ〜苦しい、ウウ〜痛い」

「王様、この薬をお飲み下さい」

「薬を飲んでもぜんぜん良くならないぞ。いったい、どういう訳だ」

この苦しんでいる人は、インドにお釈迦さまがいらした時代の、阿闍世王というとても有名な王様です。

王様の体中にできものができて、お医者さんもその病気を治すことができません。

「誰か私を助けてくれ……」

実はこの阿闍世王、原因不明の病気になる前、提婆達多という悪い僧侶の言うことを聞いて、自分のお父さんを殺し、お母さんを牢獄に入れ、お釈迦さまの命をうばおうと、大変悪いことをしたのです。

「王様、こんな病気になったのは、きっと、お釈迦様の教えを信じないで、悪いことばかりやってきた報いに違いありません」

「そうです。犯した罪を深く反省して、お釈迦さまの教えを信じるしかありません」
苦しむ王様に大臣は、真剣に仏様の教えを信じるようにすすめました。



王様は大臣のすすめを聞き入れ、お釈迦さまにお詫びし、それからはお釈迦さまの教えを信仰し、法華経によつて病気もおしていただきました。

「王様、仏様の教えを信じて良かったですね」「おっはっはっはっはっはっはっは。知らなかったとはいえ恐ろしいことじゃ。それにしても、本当に仏さまの教えはすごいものじゃ……」

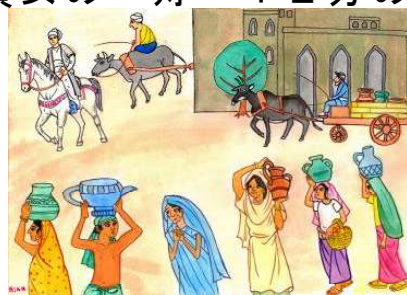
王様は、それ以来仏様に感謝の気持ちをもつて、たくさんの食べ物やお金などを御供養いたしました。

「ところで、今度はなにを御供養させていた
だこうか？」

「そうですね。お釈迦さまの御説法の場所を立派にする、御灯明を御供養されてはいかが
でしょうか」

と、そばにいた大臣が答えました。

「そうか。では国中の油を集めて、お釈迦さまのおられる祇園精舎にお届けしなさい」と、王様は家来に命令しました。



その日から、油を頭に乘せたり、馬車ばしやに積つんだり、大勢おおぜいの人々が、油を運んでいます。それを見ていた一人の年老としおいたおばあさんがおりました。

おばあさんの名前はナンダといいました。ナンダは不思議ふしぎに思つて、

「すみません。皆さんは、何をどこはこに運んで
いるのですか？」
と聞きました。

すると、王様がお釈迦さまの為ために、たくさん
の御灯明を御供養することを、教えてもらい
ました。

「ああ、私もその御供養を一緒いっしょにさせていた
だきたい。何百回、何千回と生まれ変わつて
も、仏様にお会いすることはむずかしく、ま
して、御供養させて頂くことはなかなかでき
ない。私も御灯明の御供養がしたい」
と、ナンダは心から思いました。



しかし、御灯明をともし油を用意するためには、お金が必要です。

しかし、ナンダはその日暮らしの、とても貧まずしい生活でした。

「御供養したいけど、私には少ししかお金がない」

見てみると、小銭こぜにがほんの数枚すうまいあるだけでした。

ナンダは、そのわずかなお金を握にぎりしめて、油屋さんへ駆け込こみ、

「どうか、このお金で買えるだけの油を売ってください。私も仏さまに御灯明の御供養をしたいのです」

とナンダは言いました。

ところが、そのお金とおばあさんを見た、油屋のご主人は

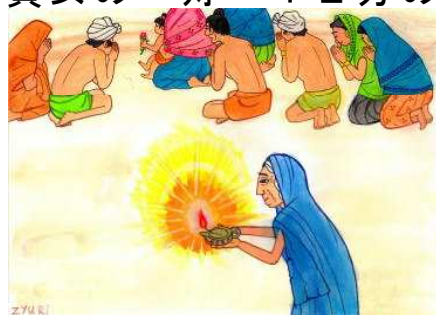
「このお金では少しの油しか買えませんよ。

それよりも、なにか食べ物を買って食べた方がいいんじゃないかい？」

と油屋のご主人がその老婆ろうばの貧まずしそうな姿を見て言いました。

しかし、ナンダの気持ちは変わりません。

その気持ちを知った主人は少し多めに油を分けてあげました。



油屋の主人は、

「ひとばんじゆう一晩中燃えるほどの油の量ではないけど、
きつとすば素晴らしい御供養になると思うよ」
とはげ励ましてくれました。

さつそくナンダは、

「早くしないと、仏さまの御説法が始まって
しまう。仏様に御灯明を御供養できると、
わたしや、世界一の幸せもんじや」
と、自分が生きている間に仏さまにお会いす
ることができ、そしていま、その仏さまに自
分の真心の御供養ができるという喜びに身も
心もつつまれ、王様が御供養したたくさん
の灯明の中に、そうつと一つだけ御灯明をお供
えするため、喜びいっぱいみちに満た心で、そ
の場所へ向かいました。



たぐさんの御灯明が、お釈迦さまやお弟子の方々に、御供養として供えられました。

王様の万灯のいっぱいある灯明の中に、貧女の灯明が一つだけ供えられました。

その日の夜のことです。

「ゴオー……、ビュー……」

突然、人も物も、吹き飛ばされてしまおうぐらいの、大風が吹いてきました。

もちろん、一瞬のうちに、お供えしてあった御灯明は消えてしまいました。

「あれっ、御灯明が一つだけ消えていないぞ。

あんなに大風だったのに」

その御灯明は、ナンダがお供えした御灯明でした。しかも、一晩中燃えつづけ、朝になっても輝きつづけていました。



お釈迦さまは、お弟子の中で一番の神通力（じんつうりき）を持ってゐる目連（もくれん）に、
「その火を消しなさい」と命じました。

目連は色々に手を尽くし、火を消そうとしましたが消えませんでした。

得意（とくい）の神通力で大風を起こしても消えませぬ。それどころか、ますますその火は勢（いきおい）よく光り輝きました。

「この御灯明は、私の力では消すことができません。どうしてもなのでしよう」と、目連がその訳（わけ）をお釈迦さまにおたずねいたしました。

お釈迦さまは、

「いくら頑張（がんば）ってもその火を消すことはできません。この御灯明を御供養されたおばあさんは、過（か）去世（こせ）においてたくさんの人達に仏さまの教えを説いてきたのです。しかし、残念（ざんねん）なことにお仏さまに巡（めぐ）り会（あ）って、御供養することのできなかつたのです。その結果、今世（こんぜ）において、あのような貧（まず）しい姿をしているのです。しかし、今回その御供養を真心込めてされたことによつて、未来世（みらいせ）において須弥灯光（しゆみとうこう）如来（にょらい）という仏さまになれるのです」と答えました。



そのおばあさんは、見るからに貧しそうな姿をしていて、たった一灯しか御供養していないのに、未来に仏になる約束が与えられました。

それに比べて、王様は立派な姿をして、しかも、いつもお釈迦さまや、そのお弟子の方々にたくさんのお供養をしています。今回だって、たくさんのお灯明を御供養しましたが、その王様には、未来に仏になる約束が与えられませんでした。

「どうして私には、仏になる約束が与えられないのか？」

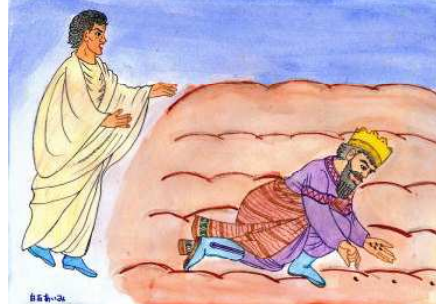
と、大臣に聞きました。大臣は、

「それは真心まごころが足りないのではないでしょうか。王様の御供養は、もとはといえればみんな国民のお金です。国民のお金を集めて、王様の名前で御供養しただけです。油は誰が運びましたか？油に明かりをつけたのは誰ですか？王様の御供養には、まだまだ真心が足りないのです」

と、王様に進言しんげんいたしました。

ナンダの御供養は、貧しい中から自分の大事な物を、心を込めて御供養したものです。

この大きな違いちがいに、王様は気がつきませんでした。



「よし。ではこの次ぎは、自分で花を栽培さいばいして、その花をお釈迦じょうずさまに御供養しよう」と、さっそく上手じょうずに花を作ることのできる人と呼んで、どの様に花を作ったらいいのか教えてもらい、誰の手も借りずに、自分の手で花を作り始めました。

「王様。何もそこままでしなくても」と、家来が言いましたが、

「いや、自分も本当に真心込めた御供養がしたいのだ」

と、王様は畑をたがやし、種を植え、毎日をやり、自分一人の手で、それは人が変わったように、一生懸命に花を作りました。



そして、90日かかって、ようやく花ができました。

毎日毎日同じことを繰り返し、丹精込めて出来上がった花は、たゞようもない美しさでした。

王様は、これまでも、たくさんの花を見てきました。が、これほど美しい花は見たことがありませんでした。

「真心のこもった花とはこれほどに美しいものなのか」と、しみじみと感じました。

まして、今回は自分の真心こめた花でしたので、花の美しさにプラスして、よりいっそうの美しくしさを感じたのでした。

王様はさつそく

「このお花を、お釈迦さまに御供養申し上げよう」

と、心からの喜びを感じました。



しかし、王様が御供養しようとしたとき、お釈迦さまは、ちようどお亡くなりになつてしまいました。

「ああ、せつかく自分で作った花をお釈迦さまに御供養させて頂こうと思つたのに、亡くなられてしまつたとは……」

と、王様はとても悲しみ、そのお花を、お釈迦さまの身体からだの上にそつと置きました。

するとその時です、

「王様よ、よくぞ真心の御供養をされました。

その御供養の大功德で、未来世みらいせいに浄其所部じようごしよぶ如来らいという仏になるであろう」

と、天からお釈迦さまの声が聞こえてきて、仏になれる約束を与えられたのでした。

今日のお話は、仏さま、すなわち御本尊様に巡り会うことができるのは、まれであり尊いことで、その仏さまに真心込めて、精一杯せいいつぱいの御供養をさせていただけること自体じたいが大きな幸せであり、未来においても数え切れない功德をいただけるということです。

何でも、心ということが大切です。見せかけではありません。真心のこもつた御本尊様へのお給仕きゆうじ、真心のこもつた御供養、真心のこもつた折伏しゃくふく、真心のこもつたお題目、その真心が大事なのです。以上で終わります。